

誰もけわしい岩山には登らずその沢口で拜んでいたのので、この霊地を元木沢とよび、その沢口を元木口と名づけられました。

文治三年、手塚の太郎金刺光盛はこの御利益のある尊像を手塚氏の守本尊として手塚の堰口に応慈山光盛寺を建て、岩山からこの寺に移して安置しました。そして木曾義仲に従って京へ上ったのです。

光盛寺も廃寺となり、手塚村の中央の東紺屋村の、元西塩田小学校校庭の南側にお堂を建てました。はじめは堂守を置いて、手塚太郎光盛の守本尊として管理をしていましたが、お堂も古くなって朽ちたので、明治二年更に無量寺本堂へ移し、昭和五十五年無量寺の境内に地藏堂をつくりそこに安置して、現在に及んでいます。

### 手塚の太郎駒の足形の橋

手塚区は、むかし信濃国塩田庄手塚の里と言いました。この里に手塚太郎金刺の光盛と言う、りっぱな武将がおりました。信濃が生んだ猛将朝日將軍、木曾義仲が依田（丸子町）の御嶽堂の城に兵を上げてからは、光盛はこの手塚の里に館をかまえて、義仲軍の西方の守備にあたっていました。

安徳天皇の寿永二年の春のこと、木曾義仲が越後の国の城資長の三万余騎という大軍を向こうに回しての戦いに出陣のおり、義仲の四天王といわれる手塚太郎金刺の光盛も、海野行弘・根津次郎貞行・余

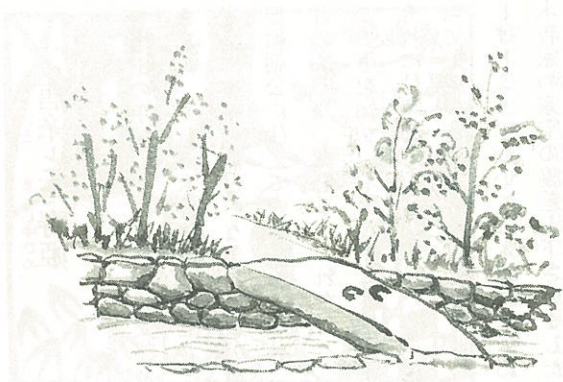
田次郎・円子小中太・弥津神平・塩田八郎高光・僧覚明等の郷土の諸将とともに、手兵数十騎を従えてこれに加わりました。

出陣の朝光盛は、妻や、娘の唐糸や乳母更科などと別れの盃をかわし、館より馬に乗り、館の前に掛られた石橋の上に馬をすすめ、手兵等とともに武運長久を祈ったのでした。

石橋の上で軍神に祈願をこめたその時、武運長久、幸運のきざしが見えたものか光盛の馬のひづめの跡が二つ、石橋につきました。

これが「手塚太郎光盛の駒の足形」の橋として有名になりました。この石橋は、手塚と新町との境にあり、長さ四尺余（一・三じ）、幅三尺（一じ）石橋で、明治初年に山田と手塚との農道に一個、手塚堰口農道に一個使われていましたが今は堰口の川ばたにあります。

手塚には手塚太郎光盛の屋敷跡の門や、光盛が開基したと伝えられている応慈山光盛寺跡があります。また、光盛の供養塔といわれている立派な五輪塔が、手塚の樋口芳雄氏宅の庭に立っています。



駒の足形